

# 炎天河

- ENTENKA -

題字 大東守

写真と文 池内文藏

## 第十五話 生き様



京を出た一万余の六波羅軍は、南都で三手に別れ、大和高取に迫った。中街道下ツ道しもつみち(現在の国道24号線)をゆく播磨軍の先頭を、赤松則村あかまつのりむら(後の円心)が駆ける。田原本辺りで越智おちの伏兵を蹴散らした後、新ノ口にのくちで竹内街道を進軍して来た一軍と合流した。陣頭に棚引く「菊水の旗」。

黒毛の馬から降りた若い武将が歩み寄って来る。背が低く、肌が浅黒い。則村も馬を降りた。「多聞兵衛たもんびょうえどのか」の問いに、浅黒い顔から一瞬白い歯が零れた。男は兜を脱ぎ、小脇に抱えると「お初にお目に掛かります。義兄あにうえ上様」と頭を下げた。

「似ておらんな—」と思いながら、則村も名乗った。「似ていない」とは、普段顔を合わせているかれの異母兄・弥四郎兵衛俊親やしろろうびょうえとしちかに、である。俊親は京で育ったせいにか、どこか雅で、かつその父・右衛門尉正遠えもんのかみまさとに似て上背があった。則村は間近に迫った敵傍山うねびやまを指し「あそこに登ってみよう」と提案すると、「御意ごい」と頷いて「多聞兵衛」こと楠木正成が則村と馬首を並べた。程なく敵傍山から降りて来たとみられる楠木の物見が駆けて来て、山中に敵影が見えないこと

を告げた。馬を進めながら左手(東の方角)に目を遣ると、六波羅の別動隊が耳成山・天香久山にそれぞれ登ってゆく。これら「大和三山」を掌握し、そこに布陣する打ち合わせで京を出た。幸いなことに、その二つの山にも敵勢はいない様だった。陣張りをする兵たちを監督しながらふたりは神武天皇陵を見下す山頂に登った。御陵の先に檀原神宮の杜がみえる。ここで則村ら播磨勢の大將軍である六波羅探題南方・北条時敦を待つ段取りなのだが、時敦の軍は未だ南都にあるという。則村は、初対面の義弟(正確には弟・円光の義弟)に何から話そうか思案しながら、かれの横顔をちらと見て、視線を前に戻した。則村と正成は十五ほどの年の差がある。かれぐらいの歳の頃、よく旅をした。播磨の一隅の地頭職の嫡子として鎌倉へ奉公に上がる旅が多かったが、畿内を巡る旅が一番楽しかった。越智にも三度来た。当主の源太は、僅かな供を連れて「さくら」という黒毛の馬で領内を巡察していた。かれは遠方より訪れた則村に対し、日常的に接している甥のように遇し、馬首を並べてかれの館へと誘った。源太は、家臣・領民・農耕用の牛馬に至るまで分け隔てなく接する男だった。が、その居城である貝吹山にはいつも「源氏の白旗」が旗めいており、「大和源氏の嫡流」たる誇りは並々ならぬものだと感じた。則村の赤松氏もまた、村上源氏の末裔を称していた。鎌倉幕府を興した「河内源氏」に対しての対抗心は無かったが、頼朝の血筋が途絶えてからの皇族將軍には忠誠心の破片もなかった。この頃の幕府は、皇族將軍を支える執権北条氏の嫡流・得宗家の身内人・長崎氏が「内管領」として実質的に支配していた。楠木氏も長崎氏同様、「得宗家被官」と称される身内人であり、その祖は北条義時の庇護を受けていた。赤松氏の祖もまた義時の娘(養女)を正室に迎え、その一族の若手が出世の過程に於いて就任する六波羅探題に仕えた。源太の嫡男とも六波羅で一緒だった時期もある。そんな関係もあって、越智とは心安い関係だった。その嫡男は、六波羅の命で伊賀に出陣した折、敵の流れ矢に当たって死んだ。源太は顔色一つ変えず、嫡男の息子を育てた。口数の少ない男だった。ある時、二人で領内の忍海の集落を巡った折、刀鍛冶の屋敷に入った。刀鍛冶は留守で、代わりに五歳ぐらいの少年が打直しを依頼していた刀を出して来た。源太は刀を受け取ると、変わりに腰刀をその少年に与えた。屋敷から出た時「あの童は」との則村の問いに源太は無言で頭を掻いた。

いま、その源太を討つ戦の陣頭にいる。山頂に盾と床几だけの簡素な本陣が作られ、遅れて到着した楠木の後詰が登って来た。正成の隣に座した初老の男が「お久しゅうござる」と頭を下げた。盾の上に絵地図を広げる若者が無言で会釈する。答礼しながら、河内を訪れた折、舟で案内をしてくれた父子を思い出した。確か息子の名は「雉丸」で、言葉を発せられなかった記憶がある。正成が「これは我が傳役・恩智左近と、その嫡子佐介」と紹介する。あの折はお互いの身分を名乗ることはなかったが、二人がただの船頭でない事は察していた。則村は左近に源太を重ねた。

「義兄上様」と正成が絵地図のなかの貝吹山を指した。「義弟」は、則村の瞳を真っ直ぐに見つめ「この城の攻略、我が手に御命じ下さいませんか」と問うた。無論、軍議は時敦が到着してからになるのだが、かれは軍事のことは則村に任せ切りで「否」とは言うまい。正成が続けた「それがしまだ未熟者ゆえ、先だつての戦で大軍勢を落として来たこの高取は怖うござる」と続けた。則村は苦笑しながら風の噂に聴くかれの八尾や湯浅との戦いぶりから「それは嘘だろう」と考えた。そしてその心を看破した

―おれに源太と刃を交えさせぬつもりだな。―

源太は、六波羅勢が大和三山に布陣する様子を高取山から眺めていた。大和の空が黄金色に染まる。

「播磨の則村が会いに来てくれたか、嬉しいのう。」

腰瓢箪から土器かわらけに注いだのは、かつて則村が絶賛した大和の地酒。

「父上」と小源太が現れ、並んで床几に座った。

「小源太、大きくなった。先だつての戦ぶり見事であった」

小源太は生まれて初めて祖父に褒められ、恐縮している。

「源太の名、そちに譲る」

「え…」

「―越智源太郎澄―と名乗れ」

そういうと源太は自らの立烏帽子を取り、小源太の菱烏帽子を奪って、被せると、菱烏帽子を丁寧に折り畳んで懐中に収め、腰刀を抜いた。二人の背後に、老武者たちが集まり、その後から小源太世代の若武者が見守っている。

源太が腰刀で髻を斬ると、老武者らが続いた。暮れなずむ空にかれらの髻が舞った。馬上の人となった源太が「鎌倉の犬どもを成敗する。わが郷に栄えあれ」と拳を突き上げる。老武者たちが「応」とつづいた。

畝傍山の本陣で高取に向かう播磨勢を見送った楠木勢百騎は、檀原神宮の杜に馬を繋ぎ、二手に別れて貝吹山城に取り付いた。正面からは正成と恩智左近らが、飛鳥を廻って裏手からは大塚惟正らが攻める。山のあちらこちらに篝火が焚かれ、「源氏の白旗」が闇に映える。佐介の物見では、この城には越智源太以下五十ほどの老兵が守るのみで、主力は高取で播磨勢を迎え撃つようだった。山に差し掛かる途中で、明らかに非戦闘員とみられる者たちが楠木勢に立ちはだかった。手には農機具を持ち、三白眼で襲い掛かって来る。源太を殺させまいとする領民たちだ。正成は攻撃を躲しながら、左近や佐介に目配せする。左近らは薙刀を逆手に持つかれらの急所を突き、気絶させて進む。「おやかた」と涙しながら路傍でのたうち回るかれらに「許せ」と詫びながら正成はゆく。山の中腹の櫓門は既に先着した大塚たちに破られており、そこかしこで越智の老兵と惟正率いる丹比(現在の松原市)の若武者が肉弾戦を展開している。正成の到着に気付いた惟正が篝火を蹴り倒しながら、「源太が首は、お譲りしよう」と観心寺の悪童時代の不敵な笑みで正成の背中を押す。

本丸に火を放ち終えた最後の三名が、それぞれ名乗り「お先に」と山を降りて行った。地酒をぐびりと飲み干した源太は、背後にまだ人の気配を感じていた。

―敵か―いや、懐かしい者の気配だ。

甍音を忍ばせ、ひとりの若者が源太の前に跪いた。武士ではない。

「忍海三郎、これより参りまする」

—ああ：—十余年前、忍海村の刀鍛冶の娘「春」に産ませた男児だった。小源太よりひとつ上で、当時まだ存命していたかれの父を憚はばかって「父子の名乗り」はしなかった。やがて「春」の死を知り、供養料と共に修繕を依頼した刀を受け取りに忍海に赴いた。確か、則村が一緒だった。その時以来だ。

城館を焼く火が、三郎の容貌かおを浮かび上がらせる。よく澄んだいい瞳をしている。戦に青春を捧げ、既に壮年となった源太の前に訪れた「初恋」。

「母上によく似ておるの、三郎」

「父上、ともに母上のもとに：これより憎き北条と相まみえます」

「ならぬ！」

ふと、京から届いた紅を恥ずかしそうに受け取る「春」の顔が過よる。あの紅は、どこかで源太の「初恋」を聴き知った楠木右衛門尉がさりげなく贈ってくれた紅だった。その息子が、まもなくここに攻め寄せる。

「生きよ、三郎。多聞兵衛殿に仕え、越智を頼む」

その時、老兵の断末魔だんまつまの声と共に、数名の武者が燃え盛る本丸に躍り込んだ。薙刀を手に三郎が迎え撃つ。

「越智源太が郎党、忍海三郎見参」

武士として育てなかった「息子」が、見事な薙刀裁きで、二人を薙ぎ倒し、大将と思しき若武者に襲い掛かる。大将は兜の鉢に一振りを喰らいながら、一回転し、源太の前に進み出た。眼と眼が合う。大将は何かを読み取ったのか、即座に振り向いて叫んだ。

「見事な薙刀じゃ、殺すな、生け捕りにせよ」

その一言に激高した三郎が大将に矛先ほこさきを向けた時、横合いから伸びた配下の逆手薙刀が三郎の脇腹を突いた。倒れた三郎を敵兵が後手に縛り上げる。

「礼を申す」と言っ、源太が太刀を抜いた。「春」の家で打った刀だ。自らの命が彼女のもとへ旅立つ日、差してゆくと決めていた。

「越智源太」

「楠木多聞兵衛」

名乗り短く、二人は間合いを詰めた。

「右衛門兵衛殿の子じゃな」

「いかにも」

「多聞兵衛」は背後の自軍に向けて「左近、佐介、手出し無用」と叫んだ。

老将と若武者が斬り結ぶ。老いたとはいえ、百戦錬磨の源太にとって、決して体格が良いとは言えない正成の太刀筋にそれほどの圧は感じなかった。

源太の脳裏に、父に叱られながらの刀を一心不乱に打つ「春」の横顔が過った。まもなくそちらへゆく。

―あとは、この若武者の胸に“わが死に様”を遺すのみ―

正成を蹴倒し、太刀を上段に構える。

―七生報国―

―南無八幡大菩薩―

その時、下からの一突きが源太を貫いた。刀を上手く打てず、僅かに舌を出しながら苦笑いする「春」の笑顔―

倒れ掛かる源太を抱きかかえる正成。

「見事じゃ」

「三郎どの、頂戴してもよろしいか」

「越智の郷、たのむ…」

「承知仕った」

「正成どの…」

「…」

「北条の犬になるな」

ひとりの漢が、笑顔のまま、逝った。